

1987年度 寒冷地形談話会

寒冷地形談話会通信

1987年度 第1号
1987年 5月18日 発行

1. 4月例会の報告

4月25日(土)東京大学で池田, 江口両氏による発表が行われ, 最後に岩田氏(三重大)にヒマラヤの水河に関して簡単にコメントをお願いした. 参加者: 26名. 気象関係の分野の方々の出席も多くなかなかの盛会であった.

2. 5月例会のお知らせ

寒冷地形談話会 5月例会

とき : 5月30日(土) PM 2:30 - 5:30

ところ : 明治大学大学院棟 2階 206号室

(JRお茶の水駅下車 徒歩7分, 大学院棟裏)

伏島祐一郎(都立大・学) : 【卒論構想発表】

二重山稜について

土屋 巖 (香川大) : 鳥海山貝形小水河の15年

— 1972~86の推移 —

3. 会費納入のお願い

今年度の会費1500円の納入を, 同封の振り込み用紙にてよろしく願いいたします. 住所・所属等の変更がおありの方は振り込み用紙にその旨明記して下さい(名簿作成の関係でなるべく6月中旬ころまでにおねがいたします). また, 御自身の現在の研究テーマあるいは寒冷地形談話会に少しでも関係しそうな情報等ございましたらば併せてお知らせ頂ければ幸いです.

口座番号 : 東京0-171342 寒冷地形談話会

4. 1987年度サマースクールのおしらせ
今年度は北上山地早地峰山周辺で行います。

【案内予定者】 鈴木由吉・松垣大介・清水長生・沖津進・西城潔
・小水内・（小岩清水・杉田久志・宮城豊彦）の各氏

【ルート】

8月21日（金）：A.M.8：30盛岡駅集合
（車数台）→区界→アイオン沢（崩壊地，アカエゾマツ林）→
区界→長野峠→大迫町大又，農業体験実習館（泊）

8月22日（土）
実習館→小田越……（徒歩）→……早地峰中岳（岩海，高山植
生）…→…小田越→実習館（泊）

8月23日（日）
実習館→小田越…→…森林限界・雪食凹地…→…小田越→実習
館→大迫 →新花巻（解散）

8月24日（月）【オプション】

実習館→小田越→川井→サクダガ森・一杯森（アースハン
モック）→盛岡（解散）

★ サマースクールは自動車をかなり利用することになりますので，
マイカー（あるいはレンタカー）で来られる方は御一報下さい。

★ 宿泊（2泊or3泊とも）：大迫町営農業体験実習館
一泊素泊1200円（ユカタ・食器・風呂付き）＋食事（自炊）代
（TEL.0198-48-5860）

★ 申込〆切：7月10日頃までに事務局宛
〒113 文京区本郷7-3-1 東大・理・地理
高田将志 気付
寒冷地形談話会事務局

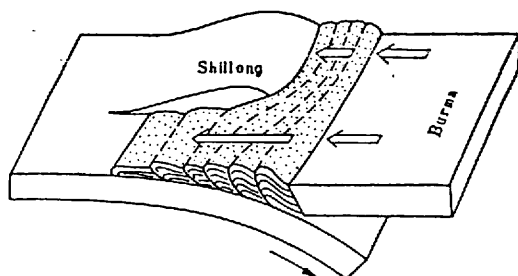
ヒマラヤ周辺の地殻変動と地形

池田安隆（東大）

（はじめにヒマラヤ周辺の地殻構造，地震と地殻変動・活構造など従来の研究の概説，次にとくにヒマラヤ東端を例に，ランドサット映像による活構造解析について紹介された．）

ヒマラヤの地形を大局的にみるとチベット高原の南端が僅かに高くなっているにすぎない，という見方もできる．負のブーゲ異常の極値はヒマラヤの位置ではなくもう少しチベット高原側にずれて出現しており，チベット高原の下には異常に厚い地殻が存在している．この原因としては，ユーラシアプレートの下にインドプレートがもぐり込み地殻が重なっているからだという説と，地殻が短縮したことによって厚くなっているという二説がある．Main Central thrust 更にその前面（南側）の Main Boundary Faults の活動ももはや active ではなく後者では北落ち（ヒマラヤ側落ち）の変位も指摘されており，active な活動は更に前面（南側）の低角逆断層で起こっている．巨大地震はこの低角化した逆断層面で発生している．

ヒマラヤ東西端は北上するインドプレートの衝突によるユーラシアプレート内部の変形が最も劇的に現れているが，西側に比べ東側の構造はほとんどわかっていなかった．地質・地形調査が困難で情報にとぼしい東側の地域では，ランドサットによる活構造解析は極めて有力な手段である．Dauki断層を境に北部と南部の Indoburman Range に水平短縮の差が認められるのは，傾動隆起して沈み込めなくなった Shillong Plateau が Indoburman Range に衝突して著しい水平短縮を起こしているためと解釈できる（図参照）のは，このランドサット像による変位地形解析の一例である．（事務局記）



Shillong Plateau と Indoburman Ranges の関係を示す模式図．砂目は Indoburman Ranges (本文参照)

ブータンの気候と地形

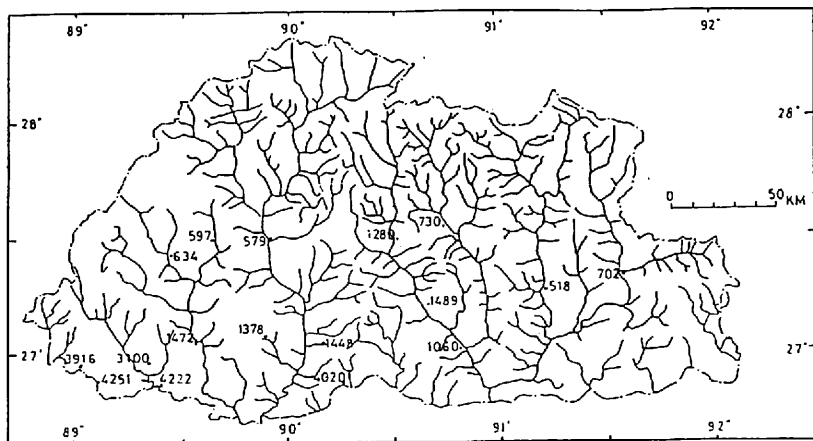
江口 卓(東大・研)

ブータンはヒマラヤ東部に位置し、東アジア、南アジア、東南アジアの3つの地域を結ぶ重要な地域の一部を成しているがこれまで気候や地形に関する研究は殆どなかった。このブータンに1985年の9-11月にかけて調査する機会を得たので、その成果を中心に報告を行った。

ブータンの気候の中でも特に降水量については、2つの問題が指摘できる。1つは、シノプティクスケールにおけるモンスーンの影響であり、もう1つはブータン国内における乾湿の地域差である。ブータンの南麓地域では、4月から6月にかけて急激な降水量の増加がおこり、降水量も多く乾季も短い。これに対しブータンの中流域の谷底は、年降水量が600-700mmで南麓に比べ非常に少なく乾燥している。この極端な地域差には、地形の影響にともなう降水のシステム変化が予想されるが、詳細な解析は今後の課題である。

一方地形については、ブータンはネパールと異なって、サブヒマラヤと Lower Himalaya の地域が狭く、High Himalaya がほとんどを占める。High Himalaya は、比較的幅の広い谷の分布する中流域を境に2つの地域に分けられる。この幅の広い谷の部分では、河床の勾配も緩やかでブータンの主要な町はこの地域と南麓の地域に分布している。中心に調査を行った中部ブータンでは、5000m付近に起伏の小さな平坦面が広がっており、どちらかというチベットの様な様相を示している。

以上のようにブータンには気候においても地形においても非常に興味深い現象があり、また研究面においても手がつけられたばかりであるので、他の分野も含めて、現在注目されている地域の1つである。



ブータンにおける平均降水量の分布(単位:mm)